

ラテンアメリカ諸国の独立

Q. フランス革命はラテンアメリカ諸国にどのような影響を与えたのか？

Q. ラテンアメリカ諸国の独立に対して合衆国はどのような立場だったのか？

ラテンアメリカ独立の背景

1. ハイチの独立（サン・ドマングの反乱1791～）

<ハイチ独立に対するフランス革命の影響は何か？>

- ・ 植民地本国であるフランスは革命中+ナポレオン戦争中**イギリスと対立**
→フランス革命政府に敵対するハイチの白人支配層はイギリスと手を組み自立を目指す
- ・ トゥッサン・ルヴェルチュール率いる黒人奴隷反乱軍は白人支配層と対立
- ・ フランス革命政府はイギリスと手を組んだ白人支配層の自立を防ぐため、黒人軍を支持
- ・ トゥッサン、イギリス軍を撃退し白人もハイチから迫害→さらに本国政府（ナポレオン軍）も撃退
- ・ 1804年 世界初の西欧的政治体制に則っていながら（「共和国」）黒人が支配する国となる

ラテンアメリカ独立の背景

<ハイチ独立の歴史的意義>

- ・ハイチ革命：黒人奴隷が白人支配層を排除して独立…フランスの「戦時下」という異常事態を盾にとつて達成された
- ・旧スペイン・ポルトガル領諸国の独立：白人支配層がイニシアティブをとり、植民地時代同様インディオや混血層を支配したまま独立

ハイチの独立は他のラテンアメリカ諸国の独立とは性質が異なる。
では、ハイチ革命の意義は何か？

①奴隷貿易廃止の功績

ハイチの独立はフランスに奴隷貿易廃止を認めさせ、他の植民地宗主国政府を突き動かした点に大きな意義を見出すことができよう。これは17～18世紀の大量に輸入されたアフリカ人奴隷を用いた砂糖プランテーションが繁栄した時代から、19～20世紀の奴隷貿易廃止と諸国の独立、それに起因する経済不振の時代への転換点として評価されている。

②クリオーリョの危機感を刺激

プランテーション中心社会であった南アメリカ諸国のクリオーリョは、ハイチ型の黒人革命を避けようとする思惑があり革命の進行を促進した。ではクリオーリョ型の独立とはどのようなものだったのか？

ラテンアメリカ独立の背景

2. クリオーリョの立場

<なぜクリオーリョは独立に向かったのか>

- ・クリオーリョとは植民地生まれの白人のことで、ペニンスラール（本国からの派遣白人）から主要な官職や聖職から排除され、植民地の政治・社会の中心から疎外されていた
 - ・アシエンダ制により大土地所有が許され砂糖やカカオなどの農産物を基盤産業とし、スペイン本国の特権商人の支配下に置かれた。（※重商主義経済）
- 利益を増大化するために、イギリスとの自由貿易を望んでいた

シモン・ボリバルは複雑な自身のクリオーリョとしての立場を以下のように述べている

「われわれアメリカ人は、生まれとわれわれの権利から言えばヨーロッパ人であり、その権利をめぐってこの国の土着の人々〔先住民〕と争わなければならないが、ところが一方ではこの国で侵略者〔スペイン人〕の侵略に対して持ちこたえなくてはならない立場だ。」

高橋均『ラテンアメリカの歴史』山川出版社（1998）P.15

大西洋革命の文脈の中のラテンアメリカ独立

3. クリオーリヨ型独立の意義

<大西洋革命という一つの転換点から見たラテンアメリカ独立の意義は何か？>

…それでは、ナポレオン帝国はなぜ早々に崩壊し、イギリスのそれは繁栄を続けることになったのか。一言で言えば、イギリスの世界支配は軍事力による支配が中心にはなっていなかったということである。独立したはずのアメリカ合衆国は、[中略] 当面は植民地時代とほとんど同じように、イギリスの最も重要な貿易パートナーであり続けた。それどころかスペインやポルトガルから独立したラテンアメリカ諸国も、イギリスの政治的・軍事的支配は受けなかったにもかかわらず、経済的にはイギリスとの関係を深め、イギリスの「自由貿易の帝国」に事実上組み込まれていった。

加藤祐三、他『世界の歴史23 アジアと欧米世界』中公文庫(2010) P.233-234

※下線は作成者による。

・ハイチは独立の後、政治的混乱が続き経済的にも混迷し、ヨーロッパ諸国の貿易パートナーになることはなかった

・クリオーリヨ主体で独立したラテンアメリカ諸国は、イギリスの帝国外貿易パートナーとなりイギリスを中心とした世界経済に組み込まれていった。資料集P.195 資料②-B参照

イギリスとアメリカの立場：モンロー宣言とカニング外交

4. モンロー宣言とカニング外交

1823年にアメリカ大統領モンローは以下の内容の教書を議会に送った

- (1) アメリカ合衆国はヨーロッパ諸国間の紛争に口を出さない
- (2) アメリカは南北アメリカに現在あるヨーロッパ諸国の植民地は承認しこれに手を出さない
- (3) 現在以上の植民地化の進行は認めない。特に**独立を達成した旧スペイン領諸国に対する弾圧の企てがあれば、これをアメリカ合衆国の平和と安寧に対する脅威とみなす**

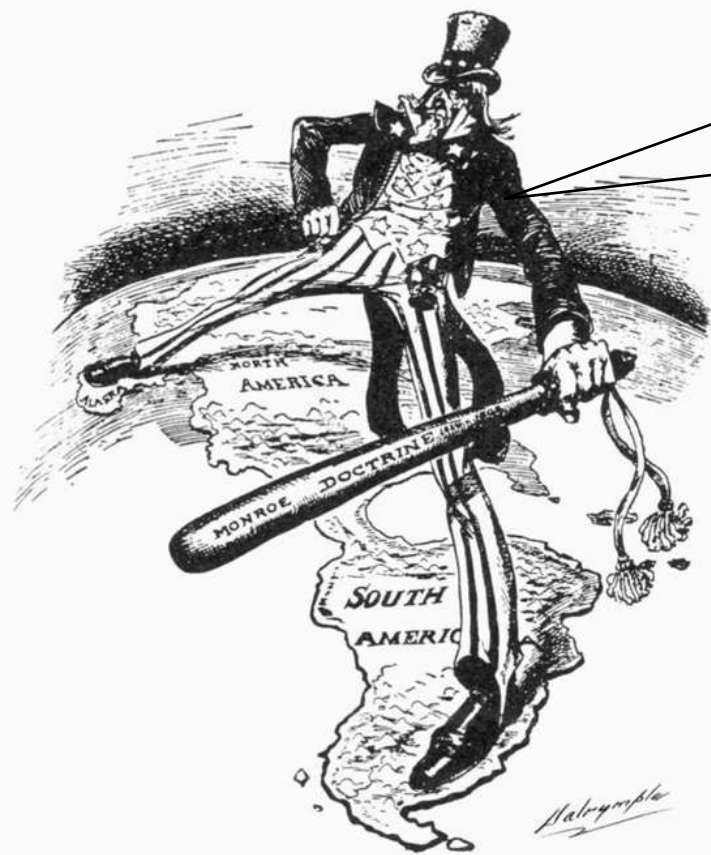
新旧大陸間の不干渉の立場を明確にした
= 「モンロー主義」と呼ばれ、アメリカ外交の大原則となる。

☆モンロー宣言はイギリスのカニング外交に同調するもの

1822年 フランス・オーストリアなどにヨーロッパ列強がラテンアメリカ独立への介入を画策
ラテンアメリカ諸国との自由貿易で利益を上げていたイギリスはこれを拒否

イギリス外相カニングがこの干渉に反対する旨の共同宣言を出そうと合衆国に持ちかけ、モンロー宣言が出された

風刺画分析



この人誰？

アンクル・サム (Uncle Sam)：アメリカ合衆国を擬人化したキャラクターで風刺画などで用いられる。星柄のシルクハットで蝶ネクタイという、星条旗をモチーフにした服装で、白人。

何が描かれている？

- ・アンクル・サムが「モンロー宣言」(Monroe Doctrine)と書かれた棍棒を大西洋に対し盾のように持っている。
- ・アンクル・サムの脚が南北アメリカにまたがっている。

誰の視点から描かれている？

- ・実はこの風刺画は1904年以降に描かれたもの。(モンロー大統領によるモンロー宣言は1823年)
- ・セオドア・ルーズヴェルト大統領がモンロー宣言を拡大解釈し、ラテンアメリカ地域におけるアメリカの権益を確保し、ヨーロッパの干渉を排除する「棍棒外交」をヨーロッパの立場から風刺している。※今後の学習内容

19世紀末、ドイツやアメリカの急迫によりイギリスの経済的優位に陰りが見え始めた時代、モンロー主義はラテンアメリカをヨーロッパの干渉に対して聖域化するだけでなく、合衆国による西半球勢力圏宣言とみなされるようになっていく。